

報告者：寺木秀一（東京都・調布市立布田小学校長）

調査日：2005年8月6日～20日

1 ボランティアとして

スリランカ、中央部の古都ポロンナルワの10世紀の史跡で Toque Macaque（テンブルモンキー、ニホンザルと同じ Macaque 属の小型のサル）生態調査体験をした。今年度の TeamIVはアメリカ合衆国から2名、日本から2名の計4であった。私たちはボランティアと呼ばれ、デッツ博士の33年間にわたる霊長類調査研究の一端を担うことができる光栄に与ることになった。

初日には博士からその後の継続した調査地であるテンブル（史跡）でサルの食料になる植物の名称と特徴を教唆していただいた。日本にも似たような植物があるのでそれと類推して記憶するようにした。

2日目以降は、4人に役割が分担をされ、一つのグループ（Gro.D4）の一日の移動の記録と特定したサルの行動を観察して1分毎に記録を行うことになった。午前中、おおむね夜明けの5時30分から10時30分、午後4時30分から6時30分の計7時間にわたる調査であった。

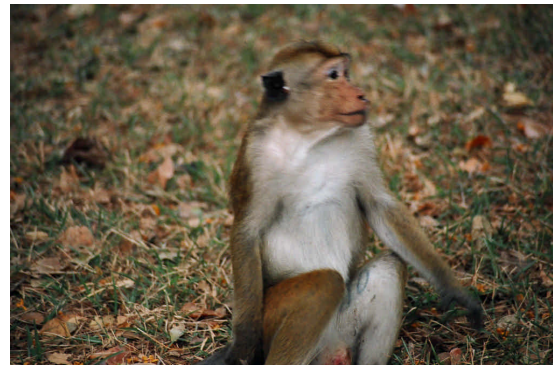
調査項目は摂食-F（フィールドノートにはF1のように記号で記載する、場所は1は地面、2は塀や樹の幹や枝、3は樹冠、以下同様）移動-M，T、（トラベリング長い移動）休息-R，プレイ-P，睡眠-S，グルーミングなど-Gなどである。私が行動記録を担当したのは大人の雌のマカクで Seldia というサルであった。この個体認識が2つめの難関であった。はじめの頃は、彼女を見つけ、後を追ひ、見失ってアシスタントのからあそこに居るよと教えられる毎日であった。

日がたつにつれ彼女に会うのが楽しみになり、彼女も私を意志すようになった。（というはたぶん思いこみ）さらに慣れてくるとグループ全体の動きの中で彼女の行動を関づけてみるができるようになってきた。

2 環境教育にどのように生かすことができるか

自然観察の手続きの方法を生かす

小学校における環境学習は様々な領域にわたっている。総合的な学習の時間や社会科、理科などの時間にそれまでの学習を「環境」の視点から捉え直して、あるいは地球環境保護の立場を強調して学習しているのが現状である。環境を意識するはじめての一步は対象とする自然についての情報を収集することである。それまで自然観察の手法を学ぶことのなかった（このことについては小学校理科教育



の現状が原因であると言われるがここでは論じない) そのため子どもたちはインターネットの Web にそのフィールドを求めがちである。そこで打開策を求めていたところに今回の野生動物であるテンプルモンキーの生態調査法に出会うことができた。このまま小学生の学習には適応できないとしても以下のように生かすことができると考えている。

・一人の観察者が一頭について継続して観察をする。

植物の継続観察では行っているが、動物の個体認識については課題があるが、鳥類やほ乳類では可能性がある

・観察項目をあらかじめ限定して絞っておく

小学校理科では「見通しをもって」観察をすることが特に強調されているが、何をどう観察するかをあらかじめ十分に理解をすることが大切である

・データをメンバー(学校ではクラス全体)で集約して、全体像を明らかにする。

総合的な学習の時間ではその学習の終段でまとめの発表をする形態が多いが、数値やデータをもとに論議するような例はすくない。

・記載方法を簡素化して誰でも記録が取りやすくする

記号や数値をもとに記載するようにすれば、短時間で間違いなく記録をすることができる。ハンドヘルドのパソコンなどへの入力にも応用できる。

これらを試みに学校に近い都市河川に異常に繁殖したコイに関心を寄せている子が多い4学年の「野川プロジェクト」で展開する予定である。

国際的な視点で地球環境を考える

昨年まで GLOBE (環境のための地球学習観察プログラム) に参加をして、子どもたちは世界の各国の学校と、主に気象データの交換を通して交流を進める指導をしてきた。しかし、子どもたちに地球規模での環境学習を説きながら私自身は我が国での観測やデータ収集の経験はなかったのでよい機会を得たものと感じている。今後の指導に有効に生かすことができる。

あわせて今回はボランティアということについての認識を新たにする経験をした。自分で時間と経費をひねり出し参加して、自分自身の願いの達成を達成する喜びを感じる。自然保護活動と近接する領域のボランティア活動を指導するうえで私のこの変革は有意義であった。

サル学の成果を生かす

本プロジェクトに参加をする前に

- ①「特定の食物へのこだわりが低く、利用可能なものを臨機応変に探し出して利用する動物としてのヒト」とサルの間には相似性がある
- ②ヒトの「容器」=食物の分配が森からサバンナに近い環境での生活を可能にしたといわれるが、サルはその進化の過程の現在であり、森から出て暮らしている。



この2つサル学の仮説を私なりに持っていたが今回のプロジェクトに参加をして2つの仮説ともに一定の確証を得ることができた。

このことのもとに、近年話題になっている里山でのサルによる被害への対応策などを考えることができる。私の住まいに近い八王子市では夕焼け小焼け農園にサルがでて体験農園の椎茸を食べるので柵やネットで防護している。サルはヒトと同様に森とサバンナの境(=里山)に棲む動物であるとするればその姿

が当然である。しかし同じマカク属にあるニホンザルとトクマカクを同じと考えてよいか否かは未だ未確定である。

人々がサルを疎んでいると見えたと報告する観察者もいるが、私には、スリランカの古都ポワナルワの人々はこのサルとうまく共生して環境をシェアしているように見えた。